

主題「勝利を得る者の教会」

今回主題 「冠の教会」

聖書 ヨハネの黙示録 2：8～11

有賀喜一

7つの教会へのイエス・キリストの手紙を学んでおります。まず、「初めの愛に立ち返った教会」エペソについて学びました。

今回は、第2の学びとして、ヨハネの黙示録2章8～11節、スミルナの教会への手紙です。

黙示録2章

2:8 また、スミルナにある教会の御使いに書き送れ。『初めであり、終わりである方、死んで、また生きた方が言われる。

2:9 「わたしは、あなたの苦しみと貧しさを知っている。——しかしあなたは実際は富んでいる——またユダヤ人だと自称しているが、実はそうでなく、かえってサタンの会衆である人たちから、ののしられていることも知っている。

2:10 あなたが受けようとしている苦しみを恐れてはいけない。見よ。悪魔はあなたがたをためすために、あなたがたのうちのある人たちを牢に投げ入れようとしている。あなたがたは十日の間苦しみを受ける。死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。

2:11 耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。勝利を得る者は、決して第二の死によってそこなわれることはない。』

聖書を見る限りにおいて、誠に生きた教会のしるしは、第一に愛、第二に苦難です。愛と苦難は、表裏一体です。

スミルナの町は、世界でも数少ない、都市計画によって建てられ、幅広い大きな道路で東西南北と区画整理された整った町でした。アジア地方においてはエペソに次ぐ最も美しい都市でした。人々はこの町を、アジアの美、アジアの冠、アジアの花と呼んでいたため、スミルナの人々にとって、「冠」という言葉はすでになじみの深い言葉でした。

地理的には、東へ抜ける道の終点に当たる港町で、この港からエーゲ海に船出していくわけですが、安全な港でもあったとも言われております。そのため、商業が盛んでした。

同時に、ローマが確立する前からローマに対して忠節を尽くした町であったため、エペソと同じように、自由都市と認められていました。

宗教的には、高台には多くの神殿が建てられ、世界中から多くの人々が礼拝に訪れ、結果として道徳的には退廃していました。

このスミルナの町には散らされたユダヤ人たちがかなり住んでいたと言われています。

そういう背景をもったスミルナの町のこの教会は、どうして冠の教会と

なったのでしょうか。

1. 厳しい苦難の中で仕えた教会（2：9）

- ① 9節の「**苦難**」と訳されたギリシャ語は、「スリップシス」という言葉です。これは、物理的な圧力を加えることです。特に罪人の喉元に剣の先を突きつけておいて、少しでも眠気が来て、「かくっ」となったら喉が切れてしまう、そういうことをすることが「スリップシス」です。
まさに私たちの人生の試み、悩みの中で、もうこれ以上耐えられないというような、苦しいことが私たちに襲ってきた、そういう中でもあなたは耐えましたね。
- ② 次に、「**貧困**」、ギリシャ語では「プーカイア」と言う言葉で、懐にもない、貯えもない、無一物という意味です。当時のクリスチャンは、ほとんどが下層階級で、奴隷の人が多く、ほとんど収入はありませんでした。その上、クリスチャンは、常に狙われて略奪されていました。
そういう苦難と貧しさをイエス様は知っておられます。
- ③ 第3には「**投獄**」。皇帝を神々として奉っていたローマの世界では、まずクリスチャンであるということが違法でした。罰則は皇帝の気分次第で、いつ迫害の手がくだされるのか予想がつかません。一旦投獄されたら命の保証はありません。スミルナは、その様な状況の中での耐えた教会でした。

2. ユダヤ人からの中傷に耐えた教会（2：9、10）

- ① イエス様の血と肉に預かる聖餐式が、人間の血を飲み肉を食べる行為だと批判されました。
- ② 愛餐を持つことが肉欲的で不品行であると誹謗されました。
- ③ 信仰によって親と子ども達の間を引き裂く破壊者だと言われました。
- ④ ローマ皇帝を信じる人たちの中であって、クリスチャンは、ただ一人の真の神しか信じず、刻まれた神の形を持っていないということで、かえって、無神論者だと言われました。
- ⑤ 神の国を建てると言っていたので、今あるところの国をこわして暴動する者たちではないか、政治的に危険な人物だと見られました。
- ⑥ 聖霊を求めて「火を！」「火を！」と叫んでいたため、放火犯人の集まりだと誤解されました。

ユダヤ人は、真の神を知っているにも関わらず、このようにクリスチャンを誹謗中傷し迫害しました。そういう中でスミルナの教会はしっかりと耐えたわけです。

3. キリストが冠として報いる教会（2：8～11）

- ① いつも共にいてくださる報い

8節には、「初めであり、終わりであお方」とあります。どうぞ見落とさないでください。イエス様が「初めであり終わりである」ということは、ずうっと中間もあるということです。初めと終わりだけではな

いのです。まさに、このお方は、初めからずうっと私たちと共におられるお方だということです。

② 最悪を最善に変えてくださる報い

「死んでまた生きた方」です。死ぬということは最悪です。しかし、蘇りは最善です。神はよいお方です。いつもそうです。(参：ヨハネ8：28)

③ すべてを分かったださる報い

「死に至るまで忠実でありなさい」。どれだけ大きいことであるか、どれだけあなたに能力があるか、それが問題ではありません。あなたはあなた、あなたの与えられている物、あなたの能力、あなたの時間、あなたの持っている才能、それを一つ一つ忠実に活かしていきなさいということです。

「死に至るまで」には、2つの意味があります。死ぬその時までという時間的な意味と、まさに命をかけて死ぬほどまでにという程度の意味です。「キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。」(Iヨハネ3：16) そのように命をかけていくということです。

④ 優勝者の冠

「いのちの冠を与える」とあります。ギリシャ語で「冠」という時に、「ステパノス」と「ディアディーム」があります。ステパノスは王冠

のことで、ディア टीमは、勝利者に与えられる月桂冠です。死に至るまで忠実だった者に与えてくださるいのちの冠は、ディア टीमです。私たちは、ステパノスは、ほしくありません。しかし、ディア टीम勝利の冠をいただくことができます。

今年の大きな主題は、「勝利を得る者」です。この、スミルナの教会に対して、「勝利を得る者は、決して第二の死によってそこなわれることはない。」と宣言されています。

最後の結びの言葉は、**ローマ8:38～39**です。

私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。

ハレルヤ、いのちの冠をいただく教会として、終わりまで全うさせていただきます。